新・桃太郎。

imaginary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

【小説タイトル】

新·桃太郎。

【ヱヿード】

【作者名】

imaginary

【あらすじ】

り投稿した所存である。 で鬱々な作品に変貌させてある。もしかしたら、 の方々から袋叩きに遭うのではないかと危惧されながらも、 で壮快な本来の持ち味をことごとくドブに流し、 i m a g i n a r ソによる桃太郎の新訳版となる。 上・中・下の三話で構成されるもよう。 桃太郎原作ファン 陰鬱で憂鬱で沈鬱 桃太郎の優雅 こっそ

上 (前書き)

る。また、 連載を増やしてしまったと、作者は息も絶え絶えに嘆いてい

_

た。 川辺を上流へと辿ると緑に映えた武美山がそびえている。 山のふもとには雑木林に覆われるようにして佇む一軒の旅館があっ 浅木町には町内を二つに分けるように井江川が中央を流れ、 その武美 その

旅館である『空蘭荘』を営む老夫婦は、 もう三代目になる。

老夫婦にはそれがとても充実しているように思えていた。 そんな彼らにも悩みがあった。 を見せていた。若者にも負けじと汗を垂らして働いていたわけだが、 旅館は毎夜のごとく来訪客で賑わい、老夫婦は老夫婦ならぬ働き

それは子が生まれぬことであった。

ていた。 たるときを見計らっているのだ、 !」と毎晩夜空に奇声を上げ、じいさんのほうは「コウノトリはき 旅館の跡継ぎ問題も浮上していたが、 もはや、 根本的に何かを間違えていたのである。 そう焦るな」とばあさんをなだめ ばあさんは「コウノトリよ

井江川に洗濯に出掛けることになった。 由については、 そんなある日、 未だ定かでない。 じいさんは武美山へ柴刈りに出掛け、 洗濯機を使用しなかった理 ばあさんは

川の上流のほうから、 ばあさんが川のふちで屈みこんで、 「どんぶらこ、 どんぶらこ」と包み隠さず口 せっせと手を動かしてい

どんぶらこ」と続けると、 うな顔をし、 ねえ!」と手を振るが、 で発する奇妙な桃が流れてきた。 恐慌をきたして尻餅をついた。 桃はあざわらうかのごとく「どんぶらこ、 ばあさんの方へ流れてきた。 ばあさんはかみなりで打たれたよ 「くるなあ

た。 っと生えていた。 いざ後ろを振り返ると桃からは左右の果肉をぶちぬいて足がにょき 腰を抜かしたばあさんは地を這うようにして土手の芝生を目指し あそこであれば桃は近づいて来れまいと踏んだわけであるが、 うっすら見えるすね毛がはなはだ不気味である。

かりと割れた。 桃はてくてくとばあさんの目前まで歩いてくると、 独りでにぱっ

じであった。 中に入って 61 たのは、 桃の果肉を肌にびっしりつけた裸体のおや

_

「なんちゅうこっちゃ」

た桃太郎を見るなり口をあんぐりと開いた。 柴刈りから帰宅したじいさんは、 旅館の一室で酒とつまみに溺れ

来るなって言ったのですが、 勝手についてくるんです」

だねるような目でじいさんを見た。 ばあさんは、 申し訳なさそうに肩をすぼめると、 今後の判断をゆ

馬鹿言え、桃から人間が出てくるわけがない」

びりと破けてしまいそうであった。 い た。 腹はぶくぶく太り、青海苔をまぶしたようなひげが不潔感を強めて じいさんはそう言って、 裸体は駄目だろうと適当に繕ったじいさんの服は今にもびり いぶかしげに桃太郎をにらんだ。

つ 桃太郎は、 いったん酒を飲むのをやめると、 どこか誇らしげに言

立つまいと所思していたが、 っていたじゃないか。 を決意した。 君たちのような取り柄のない平凡な人間の家には降り 「おれはかの名高き桃太郎である。 うむ、 ١١ しかたあるまい。 いだろう。 天命を受けてこの地に立つこと 私を育てることを許可す 君たちも子を欲しが

そう言って、またぐびぐび酒を飲む。

桃太郎に飛びついた。 と目を血走りさせて、 じいさんは訳の分からない奇声を上げると、 桃太郎の巨体を揺さぶった。 「俺の酒だ! 俺のつまみだ! 発狂したかのように 俺の服だ!」

なった。 揚げカスを舌で舐めとると、 で眠そうに目を細めてあくびをした。 桃太郎は動じず、 じいさんを押しのけて、 むしろゆりかごに揺られたような感覚 口の周りに付着したつまみの ずしんと横に

あ 今日はもう寝るかな。 いだろう 長旅で疲れた、 ちょっと部屋が狭いが、 ま

郎はすぐにいびきを掻いた。 そう言ってつまみの揚げカスが付着した指先をしゃぶると、 桃太

押しのけられたじいさんは、 んと膝を床につくのであった。 これからの生活を考え、 絶望してが

Ξ

ではない」と断固として部屋から出ることを拒んだ。 していた。 それから数ヶ月の間、 じいさんはせめて働けというが桃太郎は「 桃太郎は旅館で食っちゃ寝、 まだ、その時 食っちゃ寝と

桃太郎は次のようなことを語った。 は毎回のごとくばあさんが掃除をした。 桃太郎は部屋の片付けもしないので、 しかし、 酒とつまみが散乱した室内 掃除をする最中に

近々、 これは幼少の頃から桃太郎を務めてきた者の感なんだが、この町は る。だから、その厄難が訪れるまでは力を備えなければならんのよ。 死守つもりでいる。 難を絶つことが役目だ。 おれ 凶悪な厄難に襲われるだろう。 の本名は武田修一だ。 報酬はかくのごとき飽食であれば十分であ 職業は桃太郎で、 おれはその厄難から君たちを その町に出現する

た。 んようにな」であった。 桃太郎はばあさんが掃除に来るたびに、 しかし、 話のくくりは必ず「だから、酒とつまみの謝物は怠ら すこぶる怪しいのである。 同じようなことを口に

望が、異様ではあるが叶えられた気がして、彼のために働くという ことが苦ではなくなっていたのである。近来に待ち受ける厄難に桃 太郎が活躍するというのだから、 つ愛情が芽生えていた。 子を授かるという成し遂げられずにいた切 老夫婦は桃太郎の言動に迷惑がりながらも、 それでいいだろうと素直に首肯し 彼に少しづ

情景にことごとく精神異常をきたすのであった。 物園のトドを見るような感覚で見学したものの、 となった。 相変わらずに暖衣飽食を味わい、ぶくぶく太った身体は旅館の名物 しか 来訪客は桃太郎を一目見ておこうと旅館に足を運び、 厄難は一年経ってもやってこなかった。 そのグロデスクな 桃太郎は旅館で 動

さらに忙しくなり老夫婦に莫大な富をもたらした。 事は知る由もない桃太郎は独りで煩悩を重ねていた。 ニュアンスに人々はついつい来訪してしまう。そうすると、 されど、 その嘔吐感を呼び起こすこと請け合いと囁かれた新しい 旅館は

なぜならば、 厄難がやってこないからであった。

たが、 もはや、 全ての退路が断たれたように思われた。 老夫婦は一切の愛情を注いでくれるので、それもまかり通ら 「おれ自身が厄難です」と言って早々と逃げ出そうとし

Д

でくるなり、 しかし、 そんなある日の早朝である。 慌てた様子で、されど少し嬉しそうに言った。 ばあさんは部屋に飛び込ん

昨 夜、 町に鬼が現れたって! あんたの出番がようやく来たんよ

幅が広く尋常ではないオーラをまとっている。 シルエットだけを見たというのだが、 話によると、 昨晩は月が隠れて顔が明白とせず目撃者はその鬼の 体長は二メートルほどあり肩 コンビニのAT M や

各地の自動販売機はことごとく破壊され、 れてしまっているという。 中身をさらりと持ち出さ

「ははは、そろそろかなと思っていたのだ!」

気盛んにそれもあおった。 を知った町の住人たちは、 前夜祭だと言って酒をたらふく飲んだ。桃太郎が鬼と対峙すること 桃太郎はご機嫌になると、 数々の酒の銘柄をもたらし、 ひげを剃り、厄難へ立ち向かうため 桃太郎は意

ゆえに、 翌日は二日酔いで起きることが叶わなかった。

たという。 かったが、 くのであった。 しかし、 たくさんの盗品を抱えた鬼は明け方に西端の方へと帰っ 町人らはそれを聞いて鬼の住処が武美山ではないかと推 その間にも鬼は夜な夜な町を荒らし、 新たな目撃証言によると、やっぱり顔は明白としな 町のものを強奪

五

も悲しい 太郎は「イカの天ぷらがいい」と駄々をこねたが、 にばあさんは昨夜作ったきびだんごを渡した。 木町と訂正した。そして『浅木町一』ののぼりを背につけた桃太郎 るの頬を紅潮させた桃太郎はマジックで日本に斜線を引くと隣に浅 がけて桃太郎に渡した。しかし、「これはやりすぎだよ」とつるつ ことになった。じいさんは『日本一』と書いた勇ましいのぼりを手 いから復活した桃太郎は翌日の夕べ、ついに鬼退治へ出掛ける 顔をするので「冗談だよ」といって逃げるように町へ向か 絹袋を受け取った桃 ばあさんがとて

頃には空は紺色になっていた。 街を横切った。 夕日に映えた町並みを井江川にそって歩き、 ケヤキが連なる表通りを真っ直ぐ進み、 戸瀬橋を渡って住宅 街についた

歩き疲れた桃太郎は、 ンチに座ることにした。 大手電気家具店の目と鼻の先にある公園のべ

すると、 いつの間にかベンチの周りを三人の男が囲んでいた。

「誰だ、おまえらは」

うな垂れていた頭をむっくり上げると、 桃太郎は男たちを睨んだ。

おれ犬井和也、 空蘭壮で桃太郎君を見たことあるよ」

おれ猿田智樹、 空蘭壮で桃太郎君を見たことあるよ」

おれキジヌファー森夫、 空蘭壮で桃太郎君を見たことあるよ」

き出した。 三人は同じことを繰り返し言うと、 いっせいに手を桃太郎へと突

『家来になるから、きびだんごちょうだい』

絹袋の中身がきびだんごだと知っていた理由や、 した名をもつ者への疑問は棚に上げておくことにした。 もはや、 話の展開が早すぎて桃太郎はあんぐりと口を開いたが、 恐ろしく現実離れ

お前たち、 ての誇りはないのか」 きびだんご一つで家来に成り下がるとは浅木町市民と

島をみつけた海賊のように飛び跳ねて喜んだ。 にくくっていた絹袋を三人の前で突き出して見せると、 桃太郎は呆れた様子で深くベンチにもたれかかった。 よだれが糸を引いて 男たちは宝 そして、

「それ、おくれ!」

[']う、うまそうだ!」

「待ってました!」

開けっぴろげの袋の口からいくつかきびだんごが飛び出して、芝生 で跳ねた。 中から放たれた絹袋は空中に綺麗な弧を描き、遠方の芝生に落ちた。 を見つめ、「こんなものくれてやる」と絹袋を投じた。 何をそんなに躍起になっているのかと桃太郎は冷めた視線で彼 桃太郎の掌

男らはその上で腹ばいになりながらもきびだんごを取り合っていた。 ラッグス式にきびだんごに飛び込んだ。芝生がえぐられ、 男らは我先にと互いを押しのけあいながら駆けて行き、 土が飛び、 ビーチフ

一滑稽だなあ_

の間にも男たちは泥土の付着したきびだんごを無我夢中で口へ運び あごについた肉のかたまりをぶるぶる震わせて気持ち悪がった。 うまい」 桃太郎はゴキブリを潰した上履きを見たかのような顔をすると、 「うまい」と至福の歓声を上げている。

太郎はこれまでの疲れがどっと押し寄せてくるように思えてきた。 そのような動物的で非人徳的な光景を目の辺りにしていると、

中(前書き)

やあやあ皆さん御機嫌よう。

久しくお目に掛かります。

けではありません。怠惰生活に陥ったとすれば、その時点で私がそ 長い期間、更新をしませんでしたが決して怠惰生活に陥っていたわ こから自力で抜け出せるはずがなく、ここにちゃんと戻ってきたと いうことは、そういうことではないという事です。

では、なにをしていたかって?

いや、別になにも。

六

目前 に屹立した木々の輪郭を浮き立たせていた。 て屋台のいい匂いがする。 桃太郎が長らくして目覚めると、 の大手電気家具店の電子看板が目まぐるしく煌き、 辺りはすっかり夜景であっ ゆるやかな夜風にのっ 公園の周回

ジヌファーがいた。 だったためか背中が痛かった。 と動かない。 桃太郎は身体を起こしてベンチに座りなおした。 魔女に氷付けにされたかのごとく、 目の前には正座する犬井、 硬い木製の寝台 彼らはじっ 猿田、 +

「どうした」

が漂っているように思われた。 には見えなくとも、 と口を揃えて言った。 桃太郎があごを擦って訊くと、三人は「鬼退治に行きましょ 何かこう、 きびだんごの効果は絶大であり、 すさまじい忠誠心のオーラ的なもの 三人の背後

来に囲まれベンチに座る桃太郎は、 ぶく太って片手に『浅木町一』 ね めに「これが、 っていた。 のぼりを真っ二つに折り曲げた。 」と囁きながら、 公園を通り抜けていた女子高生の何人かが「なにあれ、 しかし、 時代遅れなんだよ」とおじいさんが一生懸命作った 桃太郎は意外にも繊細な心の持ち主であったた 顔を寄せてクスクスと笑い去って行った。 ののぼりを携え、三人の正座した家 確かに底抜けの気持ち悪さを放 きしょく

を踏み鳴らした。 と羞恥は治まらず、 折っ たのぼりを投げ捨ててもなお、 桃太郎は「むききいい」と癇癪を起こして地面 女子高生から蔑視された屈辱

くそう、 こうなったら鬼でも退治して気を晴らすか」

「おお、 敏に立ち上がると、 てくる。 膝を叩いて挑戦的な視線を街全体へ送るようにした桃太郎は、 さすが」「手伝いまっせ」と三人も手をこねて後ろをつい 腹をたぷんたぷんと揺らしながら歩き出した。

チャ・ハトへの餌やりなど全三十六目の禁止事項を掲げている通称 んずん進み、犬の散歩・自転車通行・路上喫煙・恋人とのイチャイ 皆駄目商店街」を通過した。 桃太郎一行は公園をあとにすると、 肩で風を切るように街中をず

کے だろうが悪魔だろうが、 正体を炙り出してやろうという話になった。 一部から賛嘆された桃太郎がいるのだから、 歩きながら、ただ巡回して鬼を警戒するよりも、こちらからその 謝罪の意を表さずにはいられないであろう その勇姿を呈すれば鬼 こちとら浅木町一と極

郎らは意気投合を果たした。 チコロじゃいと事態を軽んじて高姿勢が最高潮へと達すると、 行内で鬼退治への拍車がかかり、 俺たちにかかれば鬼なんてイ

桃太郎の旦那。 さっさと鬼なんて退治しちゃ いましょう」

そうそう。 鬼なんて桃太郎さんにかかれば一発ですよ」

そうしたら、 皆でぱーっと酒を飲むのもいいですね

を踏み鳴らす。 て桃太郎はご機嫌であっ 三人が調子を良くするので、 た。 「はっはっは」と高らかに笑って地面 女子高生らに軽視された屈辱も忘れ

そうしているうちに、 桃太郎は以下のようなことを語った。

先についてきて悪さをするのか、未だに明白としない。 だが、なぜか毎回のごとく奴が現れる。まだ彼とは一度も対面して 頃から因縁があってな。 そろそろこの因縁を断ち切りたいところなんだ。 いないが、 俺は十二歳 噂を聞くに全てが同一の鬼らしい。 の頃から桃太郎を生業とした身だが、 俺は町から町へ旅して各地の厄難を絶つの なんで奴が俺の行く 鬼とは二十歳 俺としても

今行くぞ」と明言した。すると、調子を合わせて歩を進めていた三 人の内のキジヌファーが思いついたように甲高い声を出した。 桃太郎はそう言ったあとに丸太のような腕を突き上げて「鬼よ、 そうだ。 何で今まで気づかなかったんだろう!」 「あ

なにが?」 は両手を大袈裟に動かしながら説明を始めた。 と桃太郎がキジヌファ ーへ視線を向けると、 キジヌフ

二メートルですから目撃証言とも一致しますし、無愛想で犯罪なん がよくて、 とか近所の人に言われるような人です。 かして捕まったらテレビの取材で『いつか、やると思ってました』 武美山のふもとに鬼島さんという男が住んでますよ。 ませんが」 ちょうど桃太郎さんと同じぐらいの巨体ですよ。 まあ、 近所には誰も住んで とても体格 つまり、

歩き始めた。 郎の顔に少しだけ億劫が見て取れた。 まで戻らなければいけない。 桃太郎は「 ほぼ益なくトンボ返しで戻らなければならないことに、 目的地が武美山のふもとなので、 それだ!」と手を打つと、 三人の家来を護衛に付けたのは良いも 踵を返して武美山 結局は空蘭荘の付近 のほうへ

七

物の影のようで、 ひとつの黒いシルエットになっている。そのシルエットはまるで怪 ンジ色の灯りは、 周辺は夜に没して、 二階の窓の閉ざされたカーテンから淡く漏れるオ 桃太郎一行を激しく睨む眼にも見えた。 目の前の邸宅はその背後の雑木林と同化し

き - ブから歯磨き粉が押し出てくるように毛穴から止め処なく汗が出 にじませて、太い腕でそれを仕切りにぬぐっている。しかし、 てくるので、 桃太郎一行が鬼島の邸宅に着いたころには、 ふもとからの眺めは閑静としていた。 ぬぐってもぬぐっても意味がない。 桃太郎は額に大粒の汗を 街は静かに眠りにつ チュ

旦那、 ちゃっちゃっとインター ホン鳴らしちゃってください

と少し顔を歪ませた。 タンへ向ける。 たいな軽い言い方をするので、桃太郎は家来のくせに命令するな、 犬井が「ちゃちゃっとコンビニでプリン買ってきてください しょうがなく、 人差し指をぴんと反らせてボ み

ほうへ向けた。 Ų 指の腹がボタンに触れる直前に桃太郎は一度顔を家来の

「眠いから、やっぱり帰らない……?」

来たんだから」ともったいなそうに言い返した。 !」と罵る間もなかった。 あまりにも桃太郎が平然とつぶやいたので、三人は「意気地なし ややあって、 ようやく猿田が「ここまで

· わかったよ」

どすんと巨体が廊下を渡って玄関へやってくる気配があった。 ピンポーン」という高音が邸宅の奥のほうで響き、やがてどすん、 桃太郎は観念すると、 インターホンを強く押した。 間の抜けた「

島が靴を履くぼやけた姿がうかがえた。 玄関の戸にはすり硝子がはめ込まれてあって、 なにやら内側で鬼

まあ、 見とけ。三十秒でやつを土下座させてやる」

戸が開かれる直前に桃太郎は言った。

のかり 「どこのどいつだ。 こんな時間に訪ねてきやがって、 礼儀を知らん

Ļ もあらわになっていった。 一行を眺め回した。 軒下から庭に続く階段を一跨ぎにして降り立つ 戸から出てきた鬼島は歌舞伎役者のごとく睨みを利かせて桃太郎 そのまま門の前まで歩いてきた。 近くに来るにつれ、 その容姿

な目がある。 の顔は岩肌のようにごつごつしている。 前髪を後ろに撫で付けて額が出ているからか顔が大きく見え、 しかし、 小さかろうと目には存在感があり、 太い眉毛の下に豆粒のよう 突然見ら そ

れたら心臓を貫かれたような気分にさせるほどの眼力があっ

違うのは横幅だけである。 門をはさんで対峙した桃太郎と鬼島は確かに同等の身長であり、

「夜分に訪ねてくるくらいだから、 それ相応の理由があるんだろう

どと言った暁には庭に引きずりこまれて、朝まで徹底的に逆退治さ 貫禄があった。 れそうな気配すら桃太郎には感じられていた。 そう言って奥歯をぎりぎりと鳴らす鬼島はまさに鬼にふさわしい 「街を荒らすのはお前だな、退治してくれるわ」な

のつく態度を呈さなければならないと使命感に追われていたのであ の背中を見て固唾を呑んでいるに違いない、ならば親分として格好 桃太郎はそれでも逃げることはしなかった。 三人の家来が今自分

桃太郎は、 ゆっくりと口を開くと、 少し小さな声を出した。

かったな、 旅館の息子なんですけれども、なんていうか、 やあ、 と不意に思い立ちまして、 今日も肌寒いっすね。 私はここから少し下った所に ねえ」 これまで挨拶もしな ある

後ろで肩を並べていた三人が思わず「え」と発した。

男が自分と同じ身長であることに少しだけ物珍しそうな表情をして 馬鹿がいるわけない」と鬼島は訝しげに桃太郎を睨んだ。 るようにも見えた。 何時だと思ってるんだ。 挨拶なんて嘘だろう、 こんな時間にくる 目の前の

ははは、 その馬鹿が私でございまして、 いやあ、 恐縮ですな」

鬼退治でしょ!」と甲高い声を上げた。 わててキジヌファー に振り向く。 格好悪い親分を見るに耐えなくなったキジヌファーが、 っ わ 馬鹿」と桃太郎はあ ついに「

「三十秒でそこにいる鬼島を土下座させるんでしょ!」キジヌファ はそう付け足した。

た。 ら膝を折った。そして、「どうか、お許しを」と言って土下座をし 桃太郎はごくりと咽頭を上下させると、 鬼島の方へ向き直りなが

武美山の脇から沿って寒風が吹きすさび、 ひゅう、と音を立てた。

五人はしばらく無言であった。

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きインター 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n8993x/

新・桃太郎。

2011年11月22日03時59分発行